

身体知の観点から聴き手一話し手の関係を捉える —オーラル・ヒストリーメソッドの再検討—

Relationship between interviewer and interviewee; Validating Oral History Method

清水唯一朗¹ 諏訪正樹²

Yuichiro Shimizu and Masaki Suwa

¹ 慶應義塾大学総合政策学部

¹ Faculty of Policy Management, Keio University

² 慶應義塾大学環境情報政策学部

² Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

Abstract: What kind of question draw good response? While interview method use widely as way of qualitative study, these methodology only depend on their experiential knowledge. This paper has provided the relationship between utterance and talk-back in an interview. Though the anatomy to a series of interviews of a restaurant owner, we find out evidences either supporting these experiential knowledge or not. At first, subjective opinions which rise out from interviewer has large an effect on interviewee's narrative. Especially these kind of utterance makes interviewee to open their mind and talk their thinking from the bottom of their heart. Second, interviewer should be cautiously to show their hypothesis to interviewee. An blinkered hypothesis stir up a feeling of discomfort. On the other hand, a hypothesis with hawk-eyed listening lead a good response.

はじめに

オーラル・ヒストリーの方法論と現状

ここ 10 年ほどのあいだ、質的研究の手法として「聞く・聴く」ことが地歩を得つつある。その代表的な方法のひとつであるオーラル・ヒストリーも、学界に止まらず、ひろく人口に膾炙してきたように思われる¹。政治学では政治家、官僚、省庁、地方自治体などで、社会学では地域文化や戦争体験などでプロジェクトが展開されたほか、芸術や科学、医学、建築学といった分野でも活用が進んでいる。

手法の広がりにもなって、オーラル・ヒストリーの方法を教えることが必要となっている。これまでトンプソン [1]、御厨 [2]、ヤウ [3] などのテキストが刊行され、手法の獲得を目的とするワークショップが展開されてきた²。

しかし、そこには大きな方法論上の課題が存在しているように思う。オーラル・ヒストリーの方法は質的研究におけるインタビューの方法論に大きく依拠してきたが、それはいずれも実践における経験の蓄積に大きく依拠する一方で、実証的な検証を受けてこなかったことだ。

もちろん、経験的な方法論をやみくもに否定するつもりはない。先駆者たちの積み上げてきた経験は正しく機能することが多いだろうし、方法を教える上で経験に基づいたエピソードはわかりやすく、有用である。

他方で、これらの経験が聴き手の立場のみから積み上げられてきたこと、先駆者たちが政治学や社会学といった、特定の立場や目的から行ってきた聞き取りの経験のみに依っていることには、経験的方法論にもある種の限界があると感じざるを得ない。

第一の点について、これまでの方法論ではラポー

¹ 2001 年には政治学系の研究者によって政策研究大学院大学オーラル・政策情報プロジェクトが、03 年には社会学系の研究者を中心に日本オーラル・ヒストリー学会が発足した。

² たとえばオーラル・ヒストリー夏の学校（東京大学先端科学技術研究センター）、オーラル・ヒストリーワークショップ（日本オーラル・ヒストリー学会）など。

ル形成における聴き手の心構えやカウンセリングの技法を援用した反応の仕方などが豊富に論じられてきたものの、聴き手と話し手のやりとりと関係性が包括的に検討されることはなかった。

そのため、どのような問いに対してどのような反応が示されるのかといった発話と応答の関係図がないまま、聴き手は直感と経験のみに依拠して聞き取りを進めることとなっている。聞き取りが「芸」であるといわれること、つまり優秀な聴き手だけがもつ身体知であるのは、この検討が行われていないためだと考える。

第二の点について、インタビューの方法論では、「こうすべき」「こうしてはいけない」という技法と禁忌がしばしば示される。価値中立的な質問をする、話し手の語る内容に意見をしないといったものが代表的な例である。

その聞き取りが客観的な「事実」の獲得を目的とするものであるなら、そうした姿勢を取ることは有効だろう。しかし、それがあらゆる目的の聞き取りに相応しい方法であるかどうかは、個々のやりとりの関係を検討してみなければわからない。むしろ、目的が異なれば、立ち位置が異なれば、当然にして相応しい聴き方も変化するのではないだろうか。

身体知の観点からの再検討

こうしてみると、経験に依拠したオーラル・ヒストリーの方法論を検証するためには、オーラル・ヒストリーを聴き手と話し手の双方向的な関係性として捉え、そのやりとりを網羅的にデータ化し、実証的な分析を行う必要があることに気がつく。

そこで重要となるのは、聴き手と話し手のコミュニケーションは、相互が身体化している「聴く」「話す」という行為の積み重ねに依っていることである。とりわけ、経験を重ねた聴き手の場合、「こうすべき」「こうしてはいけない」といった聴き手のルールが身体化しており、網羅的な形態の問いができない恐れがある。

このため、本研究は政治学を専門としてオーラル・ヒストリーに取り組んできた清水と認知科学を専門として「一人称研究」に取り組んできた諏訪が知見を持ち寄って共同研究を行うことで、如上の課題に向き合うこととした。

研究の方法

本研究は大きく三つの段階に分けて進められた。まず、聞き取り調査とスクリプトの作成である。両名の関心に照らして土地と仕事を通じて哲学を知

ることをテーマに設定し、神奈川県藤沢市湘南台で38年にわたって人気飲食店を営んできたオーナーシェフに聞き取りを依頼した。昼食客が落ち着く午後の時間帯を選び、2013年7月10日、30日、8月27日にそれぞれ2時間強の聞き取りを行った。

聞き取りに際しては清水が資料を作成し、両名で事前の打ち合わせを行い、毎回、終了直後に30分程度のフィードバックを行った。分析の材料となるスクリプトは、オーラル・ヒストリーの経験が豊富な若手研究者に依頼し、文体整理をせず、バリ取りのみで作成してもらった。その分量は第1回26,525字、第2回31,183字、第3回25,123字で合計82,831となった。

次に、問いと反応それぞれについて分類を行った。具体的には、スクリプトに現れた聴き手側の全ての発話をその意図と形態に基づいて分類した。話し手の反応は本研究の関心に基づき、事実や合いの手は省き、話し手の考えや評価が含まれるものを抽出して、内容に基づいて分類した。

これに基づいて、スクリプトの各発話文冒頭に分類記号を付して、やりとりの流れを可視化した技法分析スクリプトを作成した。

最後に、この技法分析スクリプトを用いて共起分析を行い、発話がどのように連なっていくのかというシーケンスを見出し、それらのシーケンスがどのようなやりとりを導くのかを明らかにした。共起分析はKH-Corder [4]を用いてジャカード計数を算出するかたちで行った。

以下、聴き手の技法、話し手の反応についての分類を示したのちに、やりとりの構造を分析し、さらにより大きな聞き取り全体の流れを俯瞰的に検討する。

聴き手の技法を分類する

まず、聴き手の技法を分類する。質問の類型についてはすでにヤウが「問題を掘り下げる質問」「フォローアップの質問」「理由を尋ねる質問」「明確化を目的とする質問」「仮定の質問」「比較を用いた」「挑戦的な質問」と、7つの類型を示している [5]。

しかし、聴き手の側の発話は一般的な意味での「質問」に止まらないと我々は考える。また、ヤウの分類はあくまで聴き手の側の意図に基づいている。聴き手と話し手の関係性を捉えるためには、複数の話し手が会話を（もしくはより一般的に言えばコミュニケーションを）円滑に活性化するための発話技法にも焦点を当てて分類する必要があるだろう。インタビューとは聴き手と話し手のコミュニケーションであるという思想に基づき、インタビュー

とは聴き手がアクティブにコミュニケーションの活性化を図るべきだという考え方も最近現れてきている[6][7][8]。

そうした観点から、われわれはスクリプトにある聴き手側の発話を、まず「雰囲気をつくる」ものと「話を展開させるもの」という聴き手側の意図で大別した。話し手から何かを聞き出すという従来の観点では、「雰囲気をつくる」などという分類には焦点が当たらなかったかもしれない。コミュニケーションを円滑に活性化するという我々の意図ならではの分類であろう。

後者の「話を展開させるもの」は、話し手の考えを深く掘り下げ、本音の意見を促すという分類である。その意味でヤウと同じターゲットを再分類していることになる。

我々は「話を展開させるもの」について、「ダイレクトに尋ねる」「呼び水とする」「背景を考えさせる」という副分類を設けた。その上で、聴き手側の全ての発話を20の技法に分類した。

雰囲気をつくる	話を展開させる	
驚きを示す 共感を示す 理解したと示す 強めに言う 筋に乗って押す 言語化を手伝う テーマを合意する 進行する	ダイレクトに尋ねる 理由を質問 仮説を提示 アスペクトを提示 具体物を提示 オウム返し トピックを再登場 温度ある言葉を拾う それ以外(普通)	呼び水とする 主観的な意見 客観的な意見 背景を考えさせる 空間を連想させる 時間/歴史を連想させる

重要だと判明したもの

【表1 聴き手の技法分類】

それらを一覧にしたものが表1である。赤のハイライトで示した5つの技法は、本研究で明らかになった重要な技法である。ここで意識しているのは聴き手による発話の積み重ね、シークエンスが話し手の反応を引き出すという考え方である。

オーラル・ヒストリーはストーリーであり、一問一答ではない。そうであるなら、対話の分析も個別の質問にだけ焦点を当てるのではなく、雰囲気を作り上げる作業も重視し、その内容を検討していくべきと考えるからである。

話し手の応答を分類する

次に、話し手の反応を分類する。話し手の反応はまず、事実を叙述するものと、自身の考えを付して論じるものに分けられるだろう。文書資料では知る

ことのできない経験や認識を得ようとするオーラル・ヒストリーでは、前者に劣らず後者の情報が重要となる。後者については、表2に示すように3つの類型に分類することができる。

1: 定型の語り口 (頻繁に使う言葉の セットやストーリー 展開あり)	いま探索・生成(非定型)	
	2: 言葉を探す (主張は定型)	3: 主張をいま 生成
観察ポイント: 食い気味に語りだす 喋り方がすらすら 声のトーンが張る 「結局」要するに 「やっぱり」	観察ポイント: 喋りだしに間がある 喋る最中はすらすら 声のトーンが張る	観察ポイント: 喋りだしに間がある 喋る最中も間あり 喋り後半はすらすら 声のトーン抑え気味

【表2 話し手の応答—経験や認識】

経験や認識を語る場合、しばしば出来上がったストーリーが語られることがある。とりわけインタビューに慣れた著名人の場合にこの傾向が見られる。すでに何度も話したことがあり、言葉のセットができあがっているケースだ。これを「定型の語り」とする[9]。この場合、語りには記憶の美化や誇張、情報の取捨選択がすでに行われている危険性が高く、注意が必要となる。また定型の語りはその後の展開をどうしても限定的にしてしまう。語りとして完結しているからだ。

他方、定型の語りではない場合は、その場で言葉や表現を探したり、考えそのものをその場でまとめるケースもある。一つは、主張内容自体はよく考えていることではあるが、使う言葉のセットは必ずしも決まっていない場合である。これを「言葉を探す」と呼ぶ。

もう一つは、主張内容自体もインタビュー中に考え出している場合である。これを「主張を生成」と呼ぶ。非定型の語りは、定型の語りよりも生煮えの状態で語りが進み、より多様な語りを引き出せる可能性が出てくる。定型よりも望ましいかたちと我々は考える。

話し手の各々の発言が「定型の語り」かどうかを判断することは一般に難しい。厳密には本人に確かめる以外に方法はないが、インタビューという性質上本人に後から問うことは不可能である。そこで我々は、発話の仕方として観察可能な指標のみから分別する推定基準を提案した。決して検証できるわけではない仮説に過ぎないが、尤もらしい基準であると考えている。

まず、発話の喋りだしの間に注目した。定型の語り口を披露する際には、聴き手が発言している最中から「この発言に対してはあのことを話したいな」と考えるであろう。したがって、話し手はほとんど

間髪を入れず、もしくは聴き手の発言の最後にオーバーラップしながら喋りだすに違いない。しかも、しゃべっている最中も間がなく、すらすらと言葉が出現し、声のトーンも張り気味になるであろう。これらの条件すべてに合致する場合に、「定型の語り」であると分別した。

非定型の発言の場合は、いずれも聴き手の発言が終わってから喋りだすまでには間がある。それに加えて、途中からはすらすらと喋りだし声のトーンも張っている場合を「言葉を探す」のケースであると分別した。最初の間は、どういう言葉でしゃべろうかを考案する時間であろう。それに対して、途中も間があり、声のトーンも抑え気味である場合を「主張を生成」のケースと分別した。

対話の構造を分析する

シーケンスの作成

対話構造の分析には、まずシーケンスを作成する必要がある。本研究は、話し手が主体的な考えを述べるまでの流れを見るものであるから、そこに至る発言の流れをひとつのシーケンスと捉えることにした。例えば次のような例が挙げられる。

聴き手【主観1】 エビの殻をむいたときに手についているコレがうまいんじゃないかっていつも思うんですけど。

話し手 そうなんですよ。

聴き手【主観2】 ふきたくない、なめたい(笑い)。

話し手【考え1】 そうなんですよ。殻のどこがおいしいかなんて、普通はあんまり考えないじゃないですか。考えるのかな。だんだん考えるようになりますよね。

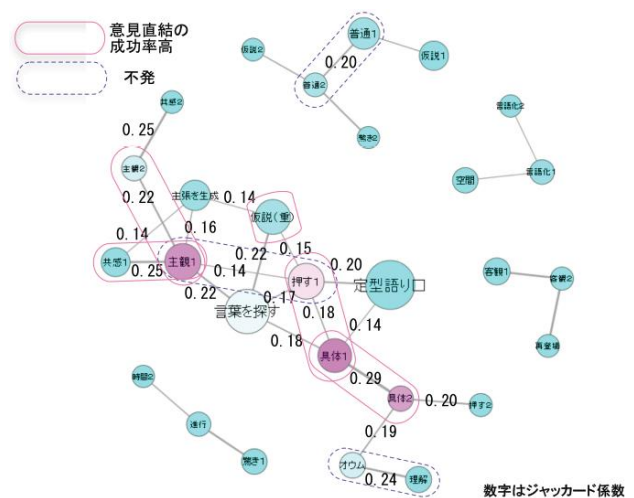
聴き手【主観3】 僕も時期を同じくして、学生になってパスタが好きなんだって気づいて食べ歩いてから気付き始めました。

話し手【考え2】 最近入ってきた新人と、なぜおいしいか、なぜまずいかというのは、同じでしょ、という話になりました。原因を探そうよと。そうでないといつまでたってもわからない。

上記の例のように同じ話題のなかで同種の技法や応答が現れる場合がある。この時は【主観1】【主観2】のように数字を伏した。特に話し手の考えの表明が連続する場合には、【考え1】に至るシーケンスと同様に、【考え2】に至るシーケンスを設定した。

シーケンスの構造分析

シーケンスがどのような発言の連続で構成されていくのか、どのようなシーケンスがどのような話し手の応答を導くのかを明らかにするため、ジャカード係数を用いた共起分析を行った。図1はその関係図である。技法の名称は表1、応答の名称は表2に対応している。それぞれの発言の共起関係を線で示し、話し手の意見(表3)に直結した技法シーケンスを赤実線で、つながっていないシーケンスを黒点線で囲った。



【図1 質問技法と応答の共起関係】

経験的方法論の検証

この分析から、これまで言われてきたオーラル・ヒストリーをめぐるいくつかの経験的方法論を検証することができた。

まず、政治学・経済学系のオーラル・ヒストリーで言われてきた、聴き手の主観を抑え、客観的な情報を提示することで話し手から価値中立的な事象を引き出すことができるとする経験則を検証してみたい[10]。

この発言に該当するのは、図中の「客観1」「客観2」である。「空間」や「時間」も客観的な情報として提示される場合が多い。

では、この4つの発言形態が結びつく先を見るといずれも発言のみであり、話し手の考えのみを対象とした今回の応答とは結びついていない。すなわち、これらの発言形態が結びついているのは、今回摘出してない、話し手の特徴的な考えが入らないってない応答ということになる。上記の経験則は妥当しているとみてよいだろう。

次に、ストーリー転換について考えたい。オーラル・ヒストリーでは、話し手の持つストーリーをありのまま引き出すことを重視するため、聴き手の側が仮説を提示して話題の方向性に変化を与えることは避けるべきという考えがあり、議論の対象となってきた [11]。

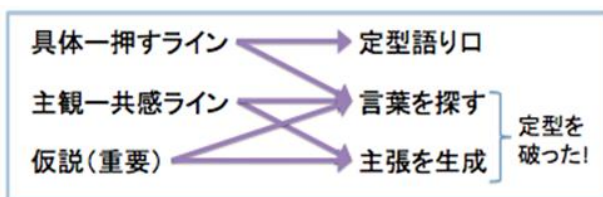
これに該当する発話形態は「仮説」であるが、「仮説1」「仮説2」いずれを見ても強い共起関係にあるのは「普通の質問」であり、話し手の意見（前章の3つの分類である「定型の語り」「言葉を探す」「主張を生成」）のどれにも結びついていない。無味乾燥なやりとりが続いていることがわかる。聴き手の側が練られていない仮説を不作法に出しても、話し手の意見は促せていないと言える。

もうひとつ、多くの研究で重要視される傾聴マーカーについて考えてみる [12]。通常、傾聴マーカーは頷きや相づちなどであるが、本研究では「共感1」「共感2」「理解」であり、それに準ずるものとしてさらなる語りを促す「押す1」「押す2」「オウム返し」もこれに類するものと考えてきた。

それらはいずれも話し手の考えを述べる「定型」「言葉を探す」「主張を生成」につながっていている。傾聴の姿勢が具体的に発話によって示されることで語りが深まり、話し手が自らの主張を述べやすい環境が作られていることがわかる。

意見を引き出す発話シーケンス

では、話し手の意見を引き出すことのできる質問シーケンスはどのようなものなのだろうか。共起分析の結果から明らかとなったのは、「具体」―「押す」、「主観」―「共感」、「仮説（重要）」という3つのシーケンスである。



【図2 意見を引き出す発話シーケンス】

第一のシーケンス（具体―押す）は、具体例を挙げつつ話の進行を押す（サポートする）という系列で、「定型の語り」もしくは「言葉を探す」という話し手の意見を導いた。

第二のシーケンス（主観―共感）は、聴き手の主観を話し手に対する共感と織り交ぜながら話しを進める系列で、「言葉を探す」、「主張を生成」と

いう定型の語りを破ることに導いた。重要な仮説をぶつけるという第三のシーケンスも第二のシーケンスと同じ結果に導いている。

	意見引き出す	不発	出現合計数
主観―主観	10 (44%)	13 (56%)	23
主観―共感	13 (65)	7 (35)	20
主観―押す	7 (37)	12 (63)	19
具体―具体	11 (61)	7 (39)	18
具体―押す	8 (67)	4 (33)	12
普通―普通	5 (42)	7 (58)	12
オウム―理解	3 (75)	1 (25)	4
仮説(重要)	28 (62)	17 (38)	45

【表3 発話シーケンスの成功率】

この結果から導き出される知見はきわめて興味深い。すわなち、伝統的なスタンダード・インタビューで禁忌とされてきた聴き手の主観の提示が、定型の語りではなく、その場で言葉を探したり、主張を生成したりする過程を引き出すことである。定型の語り只得られるだけでは決してインタビューは成功ではなく、我々の目的は定型を破って「言葉を探す」「主張を生成」という意見を導き出すことにあることが既に述べた通りである。

この知見はふたつのさらなる考察をもたらしてくれる。まず、話し手の主体的な意見を求めるのであれば、聴き手も主体的な見解を示す必要があるという考え方である。これは従来提示されてきた禁忌を全面的に覆すインプリケーションを持つと同時に、インタビューによる記憶の「共同想起」が行われるという議論を裏付ける [13]。

一方で、聴き手から主観が提示されることで相手が考え込むことは、話し手が強く聴き手の感覚に影響を受けた語りを行う危険性も示唆している。この意味においては、むしろ従来からの禁忌が正しいと指摘することができる。

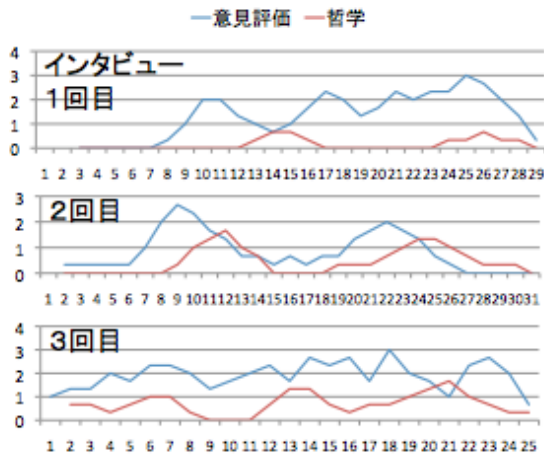
聴き手のみの考えによって発話された通常の仮説が負の効果を生む傾向があることは前章で述べた。それに対し、重要な仮説の場合には、話し手の非定型の意見をその場で導き出す効果があるようだ。聴き手による仮説の提示は一概にNGというのではなく、要は話し手の言いたいことに即した重要な仮説を聴き手が如何に繰り出せるかにかかっているのである。

では、重要な仮説はどういう系列で生まれやすいのだろうか？それに関しては本研究では明らかにならなかった。つまり、重要な仮説を導きだすような聴き手の質問技法系列に典型的な共起パターンは見出せなかった。

図1からわかるように、仮説(重)と共起が高かった質問技法は「押す」のみである。「押す」は「雰囲気をつくる」に属する技法である。「話しを展開させる」技法と「雰囲気をつくる技法」の両者がペアになって初めて意味のある系列である。逆にいえば、重要な仮説の繰り出し方にはある一定の系列パターンなるものは存在しないということなのかもしれない。それは技法系列というレベルでは分析不可能なことであって、話し手—聴き手のコミュニケーション関係構築における発話の内容・意味分析を行わないと検討できない類いのことではないかと考えられる。

全体の流れを捉える

聞き取り全体の流れについても貴重な二つの知見が得られた。第一に、話し手の発話内容の傾向が時間を重ねるにつれて見せる変化である。



【図3 話し手の発話内容の変化】

図3はスクリプトのページ数を横軸にとって、各回の話し手の発話のうち、意見評価(事実を含む)と話し手の考え(哲学)の表出数を示したものである。一見して明らかとなるのが、回を重ねるごとに提供される内容が豊富となっていることであろう。

筆者(清水)は相手の人生を聞くオーラル・ヒストリーでは3回目に聴き手と話し手の邂逅が訪れるという感覚を持っていた。これを第1回は様子見、第2回はある種の緊張の緩みがあり、第3回にいた

って聞き取りの目的と双方の語りのスタイルが共有・摺り合わされるためと考えてきたが、それがあがる程度裏付けられたかたちとなった。

もうひとつ、意見評価(事実を含む)がある程度出てきたあとに、話し手の考え(哲学)の表明が続いていく傾向も明らかにできた。図でいえば、青線の山のあとに赤線の山が続いていることが確認できる。まず事実や評価について話すと、考えを語る素地が作られるとみてよいだろう。これは聞き取りの方法を考えるうえできわめて示唆的な結果であった。

おわりに

本研究では、聞き取りを聴き手の質問だけでなく、聴き手と話し手双方の発話の関係性を分析することにより、対話の構造をシーケンスのかたちでより具体的に理解することに努めた。その結果として次の知見が得られた。

第一に聴き手の主観と話し手の語りの関係である。これまでの経験的な方法論で言われてきたとおり、主観を押さえて客観的な事象を提示した場合、語り手の発話も事実の提示となること、聴き手が主観を織り込んで発話した場合、話し手に対する共感が示されていれば、話し手は自らの考えを語る事が実証された。これは返報性の原理からも説明することができるだろう。

これは一概にスタンダード・インタビューの方法論が提示した主観の抑制の否定にはつながらないだろう。むしろ聴き手は自らの主観を出す、出さないという選択をすることによって、話し手の発話をより客観的な事実よりのものか、より主観的な考えを含むものにするかをある程度調整できることを示している。翻っていえば、それに自覚的であれば効果的な聞き取りが行えるし、無自覚であれば、目的にそぐわない聞き取り結果が生じるということである。

第二に、仮説の提示について、聴き手はきわめて慎重にならなければならないことが改めて明らかになった。聴き手は、話し手の語るストーリーに対して何らかの仮説を提示して語りをさらに豊かなものにする誘惑に駆られるものだが、ほとんどの場合、そうした仮説は空振りに終わり、語りを阻害するだけであることがわかった。

これまでの方法論でもストーリーの重視ということが強く言われてきたが、その主張を支持する結果が得られた。他方で、十分に話し手のストーリーに傾聴し、練り上げられた仮説の提示はきわめて貴重な話し手の考えを引き出すこともわかった。傾きや相づちに代表される傾聴マーカの重要性も、話し手の考えの表明を促す効果によって、その意義が証

明されており、話し手の語りに沿うことの必要性が改めて確認された。

第三に、筆者自身が経験的に感じてきた、聞き取りは3回目で邂逅を迎える、すわなち、聞き取りは3回以上行うことで聴き手と話し手の関係性が充実し、豊かな語りが得られることも、語りの質的变化から裏付けられた。これは政治学、経済学分野のオーラル・ヒストリーでも、ライフストーリー型で時間をかけること、政治的、経済的に重要なトピックのみに絞って聞くのではなく、政治家や官僚の人生を全体として聞いていくことに大きな意味があることを教えてくれる。

もっとも、これらの知見は、現段階においては3回6時間、あるレストランオーナーと筆者たちの聞き取りという一事例から得られたものに過ぎない。

他方で、これまでのオーラル・ヒストリーは本研究のように発話の性質と対話の相互関係を分析する手法は取ってこなかった。分析の対象となるスクリプトは無数にあり、今後、この分析手法を洗練しながら、より多くのスクリプトを対象とした検討を進めていきたいと考えている。

謝辞

本研究の一部は、平成25年度科学研究費補助金基盤(C)「身体を考える生活を促す支援環境と生活意識の構成論的デザイン実験」(23611039)の助成による。

参考文献

- [1] ポール・トンプソン (酒井順子訳) 『記憶から歴史へ オーラル・ヒストリーの世界』 青木書店、2002年
- [2] 御厨貴編 『オーラル・ヒストリー入門』 岩波書店、2007年
- [3] ヴァレリー・R・ヤウ (吉田かよこ監訳) 『オーラルヒストリーの実践と理論』 インターブックス、2011年
- [4] 樋口耕一 「テキスト型データの計量的分析 —2つのアプローチの峻別と統合—」 『理論と方法』19巻1号、2014年
- [5] 前掲、ヤウ 『オーラルヒストリーの実践と理論』 131-140p
- [6] 桜井厚・小林多寿子編 『ライフストーリー・インタビュー』 せりか書房、2005年、101p
- [7] ジェイムズ・ホルスタインほか (山田富秋ほか訳) 『アクティヴ・インタビュー』 せりか書房、2004年
- [8] 忽滑谷春佳、諏訪正樹 「創造思考のナラティブを創出するインタラクティブ・インタビュー」 『人工知能学会第26回全国大会』 1N2-OS-1b3、2012年
- [9] 清水唯一朗 「オーラル・ヒストリーの可能性—仮説

の発見と実証—」 RPSPP Discussion Paper No.4、2009年、14p

[10] 政策研究院政策情報プロジェクト編 『政策とオーラルヒストリー』 中央公論社、1998年

[11] 前掲、トンプソン 『記憶から歴史へ』 394p

[12] 桜井厚 『インタビューの社会学』 せりか書房、2002年、107p

[13] 有末賢 『生活史宣言 ライフストーリーの社会学』 慶應義塾大学出版会、2012年、180p